

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：32524

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00883

研究課題名（和文）テキスト読解に寄与する語彙力の分析的研究に基づく語彙習得の効果的な指導法開発

研究課題名（英文）Developing Effective Approaches to Acquire Vocabulary on the Basis of Analytical Research on Vocabulary Competence to Promote Reading Comprehension

研究代表者

田近 裕子（Tajika, Hiroko）

開智国際大学・教育学部・教授

研究者番号：80188268

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：英文読解における、未知語の推論の達成度について、語彙レベルを制限した短い物語文を用いて、未知語の特性（語彙の使用頻度、文中における文法的役割、推論の手がかりおよびストラテジー）に関して調査した。学習者の語彙レベルによる推論の傾向や、達成度、推論の手がかりとなる文脈の果たす役割、テキスト全体の意味理解などに差異はなかった。調査した10語の未知語の達成度には大きな差異があり、それぞれの語彙の特性が傾向として伺えた。テキスト読解と未知語の推論については、総じて、達成度は低いながら、従来の研究成果とほぼ同じレベルの達成度であることから、語彙の学習には多くの文脈に複数回触れることが必要であると言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

外国語学習において、教えるのも学ぶのも、最も困難とされている領域の一つである、語彙習得について、未知語の推論という新しい可能性のある観点から取り組み、言語習得への示唆を得ることができた。語彙習得においては、物語文読解の文脈では、使用頻度や学習者の持つ語彙サイズやそれぞれの語の文中における役割や活用できる文脈の意味など、さまざまな要素の活用が考えられる。一方、未知語の推論における達成度は本研究の他に従来ある研究では、そもそもあまり高くない数字が示されてきている。この結果が示唆することは、語彙の習得には、多様な文脈における多数の出会いが必須であるという事である。このことは、英語教育への応用が可能。

研究成果の概要（英文）：The research investigated the accuracy rates of inferencing unknown words attained by learners using short narrative passages with controlled vocabulary levels. The accuracy rates were measured on frequency of vocabulary words, grammatical functions, contextual clues, strategies used from the contexts, and reading comprehension of the texts. The accuracy rates of the target words in the form of non-words varied greatly, probably caused by the characteristics of each target word. The over all accuracy rate of all the target words resulted in similar range as obtained by earlier research results although it was not high. The result of the whole research suggests that for learners to acquire vocabulary words, it probably is necessary to repeatedly encounter the vocabulary items in a variety of contexts.

研究分野：第二言語習得研究

キーワード：vocabulary reading comprehension task ICT pedagogy

1. 研究開始当初の背景

語彙とテキスト読解の関係については、以前から Matthew Effect (Stanovich, 1986) と言われているように、語彙力のある人はよく読めるし、よく読める人は読むことにより語彙力がつきさらに読むという、プラスのサイクルがあるとされている。さらに逆の場合、つまり、読まないから語彙が増えない、語彙が少ないから読めない、あるいは読まないという、マイナスのサイクルがあるとも考えられている。読解力に関わる語彙については、語彙のサイズ (width, quantity) と、語彙の深さ (depth, quality) が従来研究されてきているが、それに加え、本研究では、未知語の推論で発揮されるような語彙推論の力 (lexical inferencing) がさらに深く関与するという仮説に基づいて、未知語推論の力とテキスト読解の関りを明らかにする必要があると考えた。

2. 研究の目的

1. 従来本研究グループでおこなってきた未知語の推論研究を基に、英文読解における未知語推論のストラテジーについて、その語の持つ特性や、文脈 (context) から得られる手がかり (clues) がどのように推論の達成度 (accuracy rate) に影響するかを明らかにする。

2. 英文読解における未知語の推論では、読み手の持つ語彙のサイズ、例えば、2,000、あるいは4,000、6,000 ワードファミリーなどの違いは未知語推論の達成度 (accuracy rate) に影響するかを明らかにする。また、それは、テキスト全体の読解とどのように関係するか明らかにする。

3. 上記の結果を踏まえて、現今の日本の英語教育に資する、ペダゴジー、すなわち、語彙習得のための有効なタスクや ICT 活用の活動にはどのようなものがあるかを探索する。

3. 研究の方法

1. 日本語母語話者の大学生で、英語語彙レベル (Nation, <my.vocabularysize.com>) 4,000~9,600 の英語学習者を参加者とした。
2. 語彙レベルが 4,000 程度の物語文、それぞれ約 270 語のテキストを 2 セット、読解用テキストとした。その中の名詞、動詞、形容詞、合計 10 語を無意味語に置き換え、その推論の達成度 (accuracy rate) を測定した。
3. 参加者は、2 セットの読解用テキストを読み、10 語の未知語の推論結果を英語と日本語で記述し、さらに、なぜそのような推論をしたのか、手掛かりとした内容を日本語で記述し、最後にテキスト全体のサマリーをそれぞれのテキストについて日本語で記述した。
4. 得られたデータについて、数量的分析と記述的分析を行った。数量的分析としては、未知語の種類、参加者が用いた手がかりの量とその文脈との関係、および参加者の語彙レベルそれぞれが、推論達成度 (accuracy rate) とどのように係るかを統計的に分析した。記述的分析としては、得られたサマリーについて、内容理解のレベルを数値化し、内容理解度と推論達成度 (accuracy rate) との関係性を調べた。
5. 上記の結果および、従来から本研究グループでおこなってきた、テキスト読解と語彙習得との関係に関する研究成果を基に、日本の英語教育における読解力促進および語彙力増強のための具体的方策 (pedagogy) やタスク (task) など工夫を試みた。

4. 研究成果

従来の未知語推論の研究では、未知語推論および習得の観点から、ターゲットとなる語彙に関わるタスクや認知的負荷の度合い (Nassaji, 2012; Hu & Nassaji, 2016)、出現頻度 (Reynolds, 2016; Whitford 2017) などとの関わりが指摘されてきている。今回の実験では、参加者の語彙レベルが 4,400 ワードファミリーの状況で、テキストの語彙としては 4,000 ワードファミリーという読み手にとっては比較的容易に読める範囲のテキストを用いて、未知語を無意味語に置き換えて、推論を促すタスクであった。また、参加者がいずれもほぼ同じバックグラウンドの日本語母語話者大学生であったことから、読み手による達成度の差異は比較的出ない状況だったと言えよう。さらに、ターゲット語として無意味語を用いたことから、ターゲット語を基にした推論は、参加者の誰にもできないという条件のもとでの未知語推論となったと言えよう。このような場合は、未知語推論の結果は読み手の語彙サイズにあまり影響されないと言えよう。これは、

以前に本研究グループでおこなった、語彙レベルに大きな変動のある説明文における未知語推論の場合と異なる結果となった。したがって、ひとつ言えることとしては、物語文と説明文とでは未知語の推論のストラテジーが異なる可能性がある。物語文の方が、どのようなレベルの読み手にとっても同じような未知語の推論が可能と言えるかもしれない。ターゲットとして用いた10語の無意味語それぞれについての達成度 (accuracy rate) については、11.9% から 76.3% という大きな違いが結果として得られたが、これは、読み手の語彙サイズとは直接かかわらなかった。したがって、今回の調査のように、語彙レベルの均一化された物語文の読解においては、読み手の背景知識としての語彙サイズは影響しないと考えられる。このようなテキストを使えば、語彙サイズがまだ十分ではない学習者にとっても未知語推論の力を培うことが可能であろうと考えられる。

また、学習者の持つ語彙サイズ (width, quantity) に関しては、今回の調査では、未知語推論の達成度 (accuracy rate) にも、推論に用いた手がかり (clues) の種類や量にも影響を及ぼしていない。これについては、語彙サイズと未知語推論とは相関しないとも言えるかもしれない。また、語彙サイズと推論を働かせるうえでの手がかりとして、ターゲット語の含まれる文の中、その文の前後、文法的分析、意味的類推など、またその組み合わせや総合などのストラテジーが考えられるが、今回の、語彙のレベルを統制した読解テキストにおいては、それらの要素と語彙サイズは特に相関を示してはいなかった。今後の語彙研究においては、サイズ (width, quantity) と深さ (depth, quality) の両面から調査する必要があるかもしれない。

なお、本研究の記述的分析としてサマリー記述と未知語の推論の関係を見たが、必ずしも、読解成果としてサマリーが正確に書けていることと、未知語の推論における達成度 (accuracy rate) が高い事とは相関はせず、むしろそれぞれの語における達成度が異なっていたことが、今後の研究への示唆となった。これには、それぞれの語の置かれた文脈とそれぞれの語の持つ特性とが影響していると考えられる。

今回の調査では、無意味語とした10語については、推論の達成度 (accuracy rate) に関して、品詞 (名詞と動詞) には優位の差はなく、この点では従来の報告と類似している。また、それぞれの語の推論達成度 (accuracy rate) については、10.2% ~ 76.3% と大きく差異があった。すなわち、文脈もさることながら、一つ一つの語彙について、推論の達成度は大きく異なる。一方、平均値としての達成度は40.9%で、これは、実は、従来の研究結果 (例えば、本研究グループの説明文で語彙のレベルを一定にできなかった2015年調査では43.4%、2016年は43%) と極めて類似した達成度を示している。したがって、一つ一つの語彙については大きな変動はあるものの、平均すると達成度は約40%と考えることができる。また、過去2回の説明文の調査および今回の物語文のいずれの場合も、それぞれの語彙の推論の達成度は大きく変動することが示されている。

上記のことから、未知語の推論においては、一つ一つの語については大きな差異がみられるものの、全体的にはほぼ40%前後の達成度で推論がなされるとすることができる。ここから得られる示唆としては、それぞれの語彙を習得するためには、さまざまな文脈の中でほぼ40%の精度で推論を繰り返すことによって新しい語彙が身についていくと考えることができる。この場合、英語教育のペダゴジーへの応用としては、やはり多読などでさまざまな文脈を通して語彙に出会うことが習得につながると言えよう。具体的な教材としては、やはり多読であろう。実は、この、語彙を文脈から学ぶ学習方法は母語話者の言語習得方法に近似したものであると言える。

以上

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Hiroko Tajika
2. 発表標題 Connecting Top-down and Bottom-up Processing in Reading Comprehension -- Lexical Inferencing and Comprehension of Text
3. 学会等名 COM2021 (Conference on Multilingualism 2021 in Germany) (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	豊嶋 朗子 (Toyoshima Saeko) (20527717)	都留文科大学・その他部局等・准教授 (23501)	
研究分担者	奥脇 奈津美 (Okuwaki Natsumi) (60363884)	津田塾大学・総合政策学部・教授 (32642)	
研究分担者	野田 小枝子 (Noda Saeko) (60408474)	津田塾大学・学芸学部・教授 (32642)	
研究分担者	星野 徳子 (Hoshino Nriko) (70609841)	津田塾大学・学芸学部・准教授 (32642)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	齊藤 涼子 (Saito Ryoko) (90758509)	白百合女子大学・文学部・教授 (32627)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会	開催年
International Feedback for SLA Researchers and Those with a TESOL Background	2019年～2019年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関